

第 1 回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

- 1 日時 平成 17 年 5 月 29 日（日）午後 2 時 00 分～午後 4 時 00 分
- 2 場所 長野県庁 西庁舎 301 号室
- 3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	川島 一慶委員
岡庭 一雄委員	丸茂 貴子委員
小林 辰興委員	小池 博委員
小口 武男委員	関 哲夫委員
北原 曜委員	藤本 功委員

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

お時間になりましたので、ただ今から「第 1 回高等学校改革プラン推進委員会」を開催させていただきます。

私は第 3 通学区の推進委員会を担当させていただきます、高校教育課高校改革プラン推進ユニット主幹教育支援主事の野村貫之でございます。よろしくお願いいたします。

本日は委員長の選任までの間、司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。なお、本日の委員会は委員長選任後、委員長と事務局の打ち合わせのため、5 分程度の休憩を取らせていただきますので、あらかじめご了承ください。

それでは、今回は第 1 回の委員会でございますので、委員の皆様にご自己紹介をお願いしたいと存じます。岡庭委員さんから自己紹介をお願いしたいと思います。それでは岡庭委員さん、よろしくお願いいたします。

（岡庭委員）

下伊那の阿智村で村長をしております岡庭でございます。よろしくお願いいたします。

（野村主幹教育支援主事）

笠原委員さん、よろしくお願いいたします。

（笠原委員）

岡谷市の教育委員の笠原伸二と申します。よろしくお願いいたします。

（野村主幹教育支援主事）

小林委員さん、よろしくお願いいたします。

(小林委員)

辰野町と、それから両小野小学校組合の両方の教育長を兼ねています小林です。よろしくお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

小口委員さん、お願いします。

(小口委員)

諏訪と茅野で精密工業をやっております小口と申します。よろしくお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

池上委員さん。

(池上委員)

伊那市にございますK O A株式会社の常勤監査役の池上でございます。よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

北原委員さん、お願いします。

(北原委員)

南箕輪村にあります信州大学農学部の北原と申します。
よろしくお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

こちらにまいりまして熊谷委員さん。

(熊谷委員)

すみません、J A南信州生活部の熊谷と申します。
よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

川島委員さん、お願いします。

(川島委員)

飯田東中学校の保護者ということで出席させていただいております。飯田・下伊那P T A連合会の会長をさせていただいております。仕事のほうは弁護士をさせていただいております、川島と申します。
よろしくお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

丸茂委員さん。

(丸茂委員)

諏訪二葉高等学校保護者の丸茂貴子です。よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

小池委員さん。

(小池委員)

下諏訪中学校長の小池博といいます。よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

関委員さん、お願いします。

(関 委員)

諏訪清陵高等学校長の関でございます。よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

藤本委員さん、お願いします。

(藤本委員)

岡谷工業高等学校の藤本です。よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

ありがとうございました。

なお 14 名の委員会ではありますが、本日 2 名の方がご欠席でございます。伊那市長の小坂 檉男さま、また中学校教諭の北原秀樹さまにおかれましては、本日所用によりましてご欠席されております。ご紹介させていただきました。

続きまして委員長の選任をお願いしたいと存じます。委員長の選任は、高等学校改革プラン推進委員会設置要綱の第 5 条の規定によりまして、「推進委員会は委員長を置き、委員が互選する」となっておりますので、本推進委員会の委員長につきましてはいかがでしょうか。

(小口委員)

はい。

(野村主幹教育支援主事)

どうぞ。

(小口委員)

今回はそれぞれの皆さんが自治体関係者、それから有識者、それと学校関係者というふうに分かれておりますけれども、その中立性ということからしまして、あるいはまた地理的に中央ということからしまして、あるいは社会的経験という部分からしまして、私のお隣の池上さんがいいんじゃないかと思うんですけど、いかがでしょうか。

(野村主幹教育支援主事)

ただ今、小口委員さんから「池上委員さんに委員長就任を」というご発言がございましたけども。ほかの委員の皆さまはいかがでしょう。よろしいでしょうか。

はい、ありがとうございます。では皆さん賛成ということでありますので、池上委員さんに、それでは委員長をお願いしたいと存じます。それでは、池上委員さんにおかれましては、委員長席のほうへご移動いたしていただければと思います。

それで、会の進行について、ちょっと打ち合わせを委員長とさせていただきますので、5分間の休憩をお願いいたします。今およそ2時10分でありますので15分からの再開ということでよろしいでしょうか。お願いいたします。では中断させていただきます。

【休憩後再開】

(野村主幹教育支援主事)

それでは、5分の中断をいただきましたが、再開したいと思いますのでよろしくお願いします。

初めに池上委員長さんからごあいさつをお願いいたします。

(池上委員長)

改めまして、池上でございます。よろしくお願いいたします。

先ほどのお話で最もニュートラルな位置であるというお話がございましたが、あえて委員長をやらせていただきます。

皆さんにご協力いただきまして、何とかまとめていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは今度は副委員長を決めるのですね。

先ほどいただきました資料3でございますね。これに要綱がございまして、「委員長等」という、第5条にございますが、副委員長の設置がございますので、この件につきましては、「3 副委員長は委員長が委員のうちから指名する」というふうになっておりますので、僭越でございますがご指名を申し上げたいと思います。よろしゅうございましょうか。

では、そのようにさせていただきます。

地区は分けてまいりますと、諏訪、上下伊那というふうに分かれるのですが、諏訪地区のどなたか、岡谷市の教育委員さんの笠原伸二さんをお願いをいたしたいと思いますが、いかがでございましょうか。

(全員)

賛成。

(池上委員長)

では、ご賛同いただきましたので、そのようにいたします。

それでは改めて、ごあいさつを。

(笠原副委員長)

笠原でございます。突然のご指名で戸惑うのわけですが、高校改革推進のために、委員長を補佐しながら頑張っていきたいなと思います。よろしくお願いいたします。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは事務局から資料のご説明をいただきたいと思います。

(野村主幹教育支援主事)

よろしくお願いいたします。

その資料の説明に入る前に、委員長さんにお諮りしたいことがございます。委員長、よろしいでしょうか。

(池上委員長)

はい。

(野村主幹教育支援主事)

当推進委員会は原則的には、すべて公開で行いたいと考えております。つきましては、すべて、まずこの会を公開させていただくということについて、あるいはさらに内容につきまして議事録、そして公開していきたいと考えておりますので、この件につきまして委員の皆さんにお諮りいただくように委員長さんをお願いをしたいんですけれども。

(池上委員長)

今のご発言でございますが、よろしゅうございますか。

はい。それでは、そのように。

(藤本委員)

ちょっといいですか、委員長。

議事録は最終的には、ちょっと読ませていただけるんでしょうか。

(池上委員長)

その公開前にですか。

(藤本委員)

はい。

というのは、言葉尻等で私たちも、それなりの発言をするわけです。公開される前にチェックと言うか、見させていただくということはできるんですか。

(池上委員長)

いかがですか。

(野村主幹教育支援主事)

はい、お答えいたしたいと思います。できるだけ事前に公開以前に、その委員さんの皆さまに、こういうふうにしておりますという形でさせていただきたいと思います。そこで、これはどうも本意ではないというようなことがございましたら、もう一度まとめて納得のいく形にしたいと思います。よろしいでしょうか。

(藤本委員)

ありがとうございます。

(池上委員長)

では、そのような手順でやらさせていただきます。よろしくお願いします。

それでは、よろしくお願いいたします。

5 資料説明

(野村主幹教育支援主事)

それでは公開ということで、お願いさせていただきたいと思います。

それでは資料でございますが、資料に番号を打ってございまして、資料 7 からでございます。ちょっとご確認をいただきたいのでありますが、資料 7。番号だけで申し上げます。資料 8、とじております資料 9、資料 10、資料 11、それから分厚いものになっているので一見して分かるかと思いますが、学校要覧というものでありますが、過不足がございせんでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、資料 7 からご説明申し上げたいと思います。

資料 7 には「高等学校改革プラン推進委員会への検討依頼事項について」とございしますが、このタイトルは 5 月 13 日の教育委員会定例会の資料そのままでございますので、ちょっと皆さん、表の数値というのと合わないかなと思われるかもしれませんが、ご容赦いただければと思います。

この表には全県のものが載せてございますが、平成 2 年を 100%といたしまして、平成 17 年までは注の 2 に書いてございますように、実際の募集学級数という形で載せさせていただいております。

それから注の 1 に書いてございますけども、18 年から 25 年までは学校基本調査による数値である。それから 26 年以降は、人口移動調査による数値でございます。昨年の資料でございますけど、31 年には現在の子どもが、ちょうど高校入学の年になるという、そ

う表でございます。

南信地区に絞ってご覧いただきますと、第7区、第8区、第9区ということになるわけでございますけれども、こんなふうに見ていただければと思いますが、第7区で申し上げますと、平成2年のときには生徒数3,531名。これを基準にしておりますので、これが100%ということでもあります。その当時の募集学級数が72学級。こんなふうになってございます。以下、8区、9区も同様でございます。

平成17年の欄、右側に線がありますのは、これは実際の募集学級数ということで、ちょっと実際に明記させていただきました。7区でまた申し上げますと1,995名で、募集学級数については45と、いうことでございます。生徒数につきましては、その間にありますように平成2年と比べまして56.5%。このようになっております。

18年度以降は、まだ確定しておりませんので、おおよその見通しというふうにとらえていただければよろしいかと思いますが、それぞれの区、第7区、第8区、第9区の生徒数、それからその生徒数が平成2年と比べたら何パーセントぐらいになるかという。それから募集学級数の予想でございますけれども、並べてございます。

平成31年度のほうで募集学級数で見ますと、第7区で43ぐらいになるだろう。第8区で34になるだろう。第9区で31になるだろうということでもあります。

その右のほうでございますけれども、現在の第3通学区の学校数25というふうに決められております。5月13日の定例教委のところにおきまして、基準に基づく各通学区の学校数。これは全日制でございますが22というふうに出されております。また、その各通学区に1校ずつ設けるというふうになっております多部制・単位制につきましては1校設ける。なお、多部制・単位制につきましては、基本的には全日制という扱いではなく定時制として扱うようになっておりますので、そんなことにさせていただいております。それが資料7でございます。

続きまして資料8をご覧ください。県立高等学校の配置図でございます。全県のものを載せてございますが、この第三推進委員会の担当をします南信の部分でありますけれども、諏訪、上伊那、下伊那、7、8、9というふうになっております。ご覧いただければと思いますけれども、対象が富士見町に富士見高校がある。このように点と、それから実線で学校名を書かせていただいております。これは、おおよその位置でありますので名前が入るように、できるだけしておりますので、少し位置関係がずれているかもしれませんが、ご理解いただければと思います。

続きまして資料9でございますが、とじたものであります。平成16年度高等学校別入学者の状況ということでございます。平成16年度の全県で各通学区になっておりますので、当推進会にかかわるものとすれば3枚目のものをご覧くださいと思います。

何度も申し上げますように通学区第3でありまして、旧通学区の例で見ますと、7、8、9が書いてあるわけでございます。

高校はそこに書いてあるとおりでございます。そして、その右に書いてありますのが、それぞれの高校の所在市、所在町村でございます。16年度におきまして募集定員、富士見の場合でしたら160という数字で書かせていただきました。入学した数が140。そのうち当該の富士見町の出身者が41名。当該の郡の出身者が51名。それから旧通学区で見ますと139名ということになっております。

そして、この地元市町村生徒数でございますけれども、これはその富士見町の生徒数でございます。ですから、実際同じ生徒を比較しなければなりませんので、この地元市町村生徒数というのは平成 15 年 5 月 1 日現在の中学 3 年生の数でございます。

その右側のほうは、それぞれ割合を示してございますけれども、定員十数名ずつというのは富士見高校で申しますと募集定員 160 のところに 140 の入学者を迎えましたので、充足しているパーセントで言いますと 87.5%という数字で表わさせていただきました。同じく入学者に対する富士見町の出身者の割合。それから、また郡の割合。それから旧通学区出身者の割合。入学者 140 に対しまして 139 名でございますので、99.3%ということでございます。

それから地元の生徒が 164 名ございましたので、その中から、どのぐらいの生徒が富士見高校へ入ったという割合でございますけれども、 $41 \div 164$ ということで、およそ 4 分の 1 ですかね。25.0%というふうな数字で表わさせていただきました。以下、下の高校につきましても同じように考えていただければと思います。

なお、たとえば旧第 7 通学区、諏訪実業、諏訪清陵、諏訪二葉のところで申しますと、ひとつの諏訪市になりますので、右のほうのところに書かれています。地元市町村生徒数ということは諏訪市の数ということで 505 というふうに書いております。これが資料 9 の説明でございます。

続きまして資料 10 でございますけれども、これも全県のものを載せさせていただきました。したがって、どの通学区も同じでしたけれども、同じく第 3 通学区ということで 3 枚目をご説明させていただければと思います。

平成 16 年度および 17 年度にくる入学者選抜に関わる募集定員、志願者数、入学者数の状況でございます。高校名が書かれてございまして、学科別にしてございます。また、一番上でご説明申し上げますけれども、富士見高校普通科募集定員 120 のところに、平成 16 年度は前期選抜での定員が 36 という定員に対して志願者 49 名がありました。倍率は 1.36 ございました。合格といいますか、前期選抜で選抜された志願者が、その隣に「確約者」とありますけれども、前期選抜に合格されて必ず行きますという確約書を取るわけではございませんが、その生徒数が 36 名ということでございます。

それから、後期選抜の定員は 120 から 36 名を除きまして、84 名を定員というふうにさせていただくことになります。志願者が 65 名。倍率が 0.77 ということで合格者数が 60。合わせますと 96 ということになりますけれども、入学者数は 101 となっております。これは、入学者数は後期選抜の後の再募集というものがございまして、その中で合格した者の数も入っておりますので増えているということになります。

120 の募集定員のところで入学者数が 101 でございますので、充足率は単純計算いたしますと 84.2%。このようになるわけでございます。

同じように平成 17 年度につきまして富士見高校を見ますと、募集定員は 80 となっておりますけれども、1 クラス減ということで、この 17 年度は行われましたので 40 名減っております。それに対しまして、同じように前期選抜、後期選抜となっております。細かい説明はちょっと省きますけれども、この年は入学者数が 80 名ということで充足率は 100%。このようになっております。以下、このページの説明は省略させていただきたいと思います。これが資料 10 でございます。

続きまして資料 11 でございますが、平成 17 年度につきまして旧通学区別入学者流出入表、これは全日制のものでありますけれども、出しておりますのでご覧ください。

全体で、まず 3 つの表がございますけれども、17 年度の流出表。それから 16 年度。それから、どのように変化したかという意味で 17 年度から 16 年度を引いたものを 3 つ用意しております。

上の「from」と書いてありますけれども、中学校の通学区、11 区、12 区あるいは県外と書いてございますけれども、そちらのほうから左の縦のほうですね。高校の通学区の方への移動というふうに考えていただければと思います。

上の 7 区、8 区、9 区のところを下りていきますが、7 区のところを下りてまいりますと、0,0,1 と書いてありますけれども、7 区の中学から 1 名、旧通学区で見ると 3 通のほうへ移動したということでございます。したがって、さらに下に下がっていきますと、4 という数字が見えますが、7 区の受験のときに 7 区からの中学の卒業生 4 名が第 6 区のほうへ受験に来ているということでございます。受験といいますか、合格している。そして入学しているところでございます。6 区というのは、佐久地区にお考えいただければと思います。

それから、その下は 1,489 名でありますけれども、第 7 区の 1,489 名の方が同じ 7 区の諏訪地区になりますけれども、高校に入学している。こういう数字でございます。

また、15 というのは、7 区の中学の 15 名の者が第 8 区、上伊那のほうへ出ているということでございます。あるいは、その下の 1 名は下伊那へ出ている。あるいは、さらにその下の 1 名は木曽地区のほうへ。36 名は中信地区、塩尻、松本の 11 区のほうに流れている。こういうことになっております。

同じように 8 区、9 区を考えていただければよろしいかと思いますが、8 区では 1,482 名の方が同じ 8 区の中に合格しているということでございます。その上の 119 というのは、8 区から 7 区へ出た数字でございます。あるいは 2 段下の 68 という数字は、8 区から 9 区、上伊那から下伊那の高校へ進んだと、そういうことでございます。

9 区でございますが、1,439 名の者が同じ 9 区の中の高校に進学して、16 名の者が上伊那地区の学校へ進学した。こういうことでございます。よろしいでしょうか。

ただ、それを逆の目で見ますと、今度は横に見ますと、7 区の先ほどの 1,489 名とありますけれども、隣を見ますと考え方としては 8 区から 119 名が入っている。こういうふう読んでいくこともまた逆にできるわけでございます。右側の数は全県的な意味での、それを集計したものでございます。

それが、2 番目の表になりますとこれは 1 年前の平成 16 年度のものでございます。考え方としては同じでございますので、細かい説明は省かせていただきます。1 番下でございますが平成 17 年度から平成 16 年度というような形になっておりますので、これはどのような変化があったかということで実際に引き算をしていということでございます。区ごとの大きな変化というのは下のほうを 3 行、あるいは右の方の流入ということに現れているわけでございます。これは資料 11 でございます。

次の資料でございますが、委員の皆さまには学校要覧ということで南信地区、第 3 通学区のそれぞれの学校の、学校要覧をご用意させていただきました。

ちょうど学校では今年の学校要覧から今年の学校要覧に移るときでございますので、中に

は昨年のもので平成 16 年度のもが入っていますけれども、ご容赦いただければと思います。既に 17 年度ができているところは昨日も送られてまいりまして差し替えて、中に入れさせていただきました。

また後で申しあげますけれども、これは重いですので大変ですので、こちらのほうでお預かりして次回お持ちするというのを考えております。

以上で資料の説明は終わらせていただきます。あとは質疑等、その辺をよろしく願いいたします。

6 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。それでは先ほどこちょっとご質問がございましたように全体を通じて今からの時間のところでご質問をということだったのです。どうでしょうか。

(小池委員)

何点か疑問でちょっとご説明いただかないと分からないのでお聞きしたいと思います。まず 1 点は推進委員会という、「推進」の意味がちょっと分からないのです。ということは、この委員会としての性格が独立性を持っているのか、ここでいうと「高校減という問題について是として対応しなさい」ということでしょうか？この検討委員会もこれは、是としてこの中でものを言え、という基本的なスタンスであるのか、それともフリーな立場でものを述べていいのか？それをまず。委員会の性格といいですか、独立性といいですか、そこが 1 つ疑問であります。ご説明いただきたい。

2 つ目は昨日、新聞等で南信で 3 校減が出ていたかと思うわけでありますけれども、さっきの委員会の独立性とか、スタンス等もかわりますけれども、その数量的な縛りということはどうなのか。検討事項の第 2 条の(1 番)「魅力ある学校づくり」と違うのではないですか？3 番は当然、塩尻志学館高校辺りの実態と、効果(成果)と、課題とかが出てくればこれを検討する問題になるのですけれども。やはり(2)が一番これは問題になるわけです。そこらの数的な縛りがどうなるのかということ。それとこの委員会、総論は賛成でも各論で非常に難しくなると思うわけです。あの高校をなしにしましょうと結論を出した場合。それについての委員会の責任はどういうふうになるのか。はっきり委員の責任ですとなるのか。そこらがどうなのか疑問に感じます。

もう 1 点目、3 点目ですけれども 17 年 3 月に検討委員会の答申をいただいてその後 5 月から 12 月の間、月 2 回のペースで実施。我々として、月 2 の会合は無理なわけで、できっこないです。その短時間のうちに、とにかく方向を決定して出せということ。それはやはり無理な部分があるし、なぜそんなに焦るのかと思うわけです。それは経済的な事情もあるでしょうけれども、それよりもじっくり時間を掛けて地域社会のコンセンサスを得ながらということで、これをやっていったほうが僕はいいような気がする。

その 3 点についてちょっと僕は理解できないのでご説明いただけたらと思います。

(池上委員長)

4点ということでよろしいですね。

(小池委員)

4点になりますか。はい。

(池上委員長)

独立性の問題と、数の違いということと、当委員会の責任とか、あとは最後に検討に要する時間ですね。

(岡庭委員)

委員長さん、関連です。

私もそのことをお聞きしようと思ったわけですが、実はそのことは、要するに評議委員会のような委員会で答えていただくべき議論ではないかと私は思っています。本来ならこれは全体会議の中でもう少しやはり詳しくやるべきだという、質問も意見も許さないような、こういう専制的なやり方は決してやってはならないことだと思っている。我々は委員で賛成して委員になったわけでもなんでもないわけですが、まさに諮問委員会の一員ということでございます。今、おっしゃったようなことについては全体の中でやはり明らかにすべきで、この第3通学区の委員会の中だけで解答を得たとしてもあなたのただ、解答を得たとしてもそれはやはり教育委員会全体の考えではないかと、こう思っています。

先ほどおっしゃったように、私はもう1点、これは全体の見解としてお願いしたいのですが、吉江課長は「教育総論の問題については今回の場で触れないのだ」。問題はいつてみれば学校教育改革の問題、高校教育改革の形の問題だけにこだわって諮問したのだから、その場以外のことについては今回の委員会の中では議論しないということを申しています。2点にしか絞っていない。しかし、私は本来高校教育改革の問題というのは本質的なところにあると思っているわけです。これも言ってみればこの資料の中で見ていただいてもこれをちょっと、私も読ませていただいたわけですが2ページのところにこう書いてあるわけでございます。

これは2ページ中段のところ。「にもかかわらず、平成15年度児童生徒の生活学習実態調査によれば県立高校の場合、学習内容を理解できないにもかかわらずこういう問題が出てきています」という、どこに引っかかっているかといいますと、「平成10年6月の高校教育の改善充実についての報告書に基づく高校改革をやってきたけれども、にもかかわらず」。ここのところで重要なことはここでやられたことも同じような、どういう高校教育をやったらいいか、入試選抜制度はどうしたらいいのかという形式論が議論されただけであって、本来の子どもたちがどういう形で生活をし、高校へ入学するとき問題を持って入ってきているのか、あるいはその前段の中学校の進路指導がどうであるのかという議論が全くされないで、形だけでいくら形式でのことをしたって問題の解決にならないんじゃないかということを私は常々思っているところです。

その議論はやはりさておいて学校が形だけ変えれば、子どもは豊かに勉強していくだろ

うというのでは、教育の理論としては全く事務屋的な議論でしかないのではないかと感じるわけですし、ここの点が私も自分は阿智高校という高校のそばにおりますから思うのであります。実は私が言うのが仮説であるならばこれは全くありがたいことだと思っているのですが、人が私どものところから飯田の中心の高校にみんなが行くわけです。飯田の中心の高校は今度、子どもの数が増えてきたということで学級数を増やしたのです。地域高校は全く増やしていないのです。子どもの数はどんどん減ってくる。中心高校は普通ではまさに進学高校と言われるところへは、地域からみんな出ていくわけです。それで地域は地域の実情によって、来られない子どもはいる。

実は、飯田の子どもたちの中でその高校に入れなかった子どもたちが、地域高校に来るわけです。そして私どものところでは二ツ山という坂で、飯田から来る子どもと飯田に行く子どもがここで交差するのです。このときにその子どもたちは何を考えて学校を選んできたか、選ぶのかということを考えるときにそのことはなかったとする、ないとする、そのことが原因で今の子どもの学力の格差とか、やる気がなくなったとか、非行化とかがないとするならば、私はこれはありがたいことだと思いますが、これは非常に深い関係があるとしたら私は思えない。だとすればその問題をどういうふうに現実の問題として考えるのかということについても、長野県教育委員会としてのやはり見解を私はいただきたいと。ここで議論するよりぜひやっていただいて、本来ならこういうことの前提のところでも議論して、みんなが同じ共通の認識を持って各区に分かれる。これは当たり前のこと、常識的なことなのです。

そのことについてぜひ、私もお聞きしたいと思います。

(小林委員)

ちょっと、関連してお願いします。

辰野の小林です。

私もいろいろ細かいことはちょっと抜きにして1点だけ、どうしても今の岡庭先生と共通することですけれども、ずっとこの資料、私はかなりしっかり読んだつもりですが「6学級を標準とする」と、そこが私は非常に疑問があるのです。上限というのなら分かるのですけれども、これを標準ということは7、8学級があって、3、4、5の中間。6学級の意味はそのところの標準ということになります。そうすると私はこのことがこの検討委員会に全然触れられていないのは小中学校ではもう6学級以上といえば大規模校ということで、もう生徒指導から学力維持について非常に難しいと、こういうのが一般的な考え方です。それが6学級が標準というのがこれだけ高校改革でいろいろなやり方をこれからしていくという、今までのようなパターンでなくてやっていくというときに本当に6学級が平均といったときには校長の学校裁量の権限の強化が必要な中で、より大きなそうすると職員集団を掌握してきちとした高校にしていくということは今だってうんと大変だと思うのです。そうすると6を標準にするという根拠が私には全然分かりません。2学級以下になれば、少ないのはいろいろな効率が悪いということは分かります。しかし今、一番ここに出てきている高校教育の課題では非行やモラルの低下、これを一番言っているわけです。これは6学級以上になったら私は、極めて困難だと思います。先生方、だからこういうことについてここで話し合ってもあまり意味がないと私は思います。これこそ元に戻して全

体会で「検討委員会でこう言ったから、我々はこれをどう受け止めるか」と。それで一致したところで進めていかないと「言われたとおりによれ」なんて私はとてもじゃないですけどもできません。本当に我々が納得して「それじゃあ、こういう方法でいきましょう」という形でやるという形にしてもらわないと大変忙しい中でやるわけですから、ちょっとは前向きな気持ちでやらせてもらわないとあと、「ここの南信で3つどこを減らすかということから始める」と言われても正直に言って、非常に困ります。

以上です。

(池上委員長)

ほかに。

(藤本委員)

私も各委員さんをご発言のとおりだと思います。

例えば資料7をちょっと見ていただくと、25という数字が、22へという表が7、8、9区にありますよね。これが出てきた根拠はたぶん5.5だと思うのですが、この5.5たるや私に言わせれば、6と5の中間、というあいまいな数です。さらにこの資料を見ても本来的には76であったはずなのが、いつのまにか80になっているわけです。これは前回の教育委員会定例会でなっています。この表を見ても、あまり根拠のない数字が既にここで変わっている。

さらに、過日の定例会の中で、教育委員長さんは具体的な高校名まで上げるとおっしゃっている。そういうことになると、我々推進委員会は何か、ガス抜きで、ただ一応検討させていただくということになり、教育の本質論に入って本当に議論できない。

ちょっとこの最終報告の3ページを見ていただいて、3ページの高校教育での課題というところを見ていただければ、先ほど阿智村の岡庭委員さんのご発言がありましたけれども、この高校教育の課題のところでは学校の規模や配置の見直しは7.3パーセントです。それから現在の学科の見直しが7.5パーセントです。それよりも先ほど岡庭委員さん言われたように、高校教育をきちんとしようということで、非行やモラル低下、教職員の資質向上、入試の在り方、こちらのほうがこんなに圧倒的な数がある。だからやはり単なる数の合わせで、25を22プラス1、22にするんだというそんな委員会のやり方じゃなくて、教育論から議論していかないといけない。その辺を強く感じます。

座っていて、失礼しました。

(池上委員長)

ほかに関連の質問でありますか。

それでは、ちょっと整理させていただいて。先ほどの話の中でこういうようなブロック的な対応でなくて全体で議論をあおって、本質的にすべてというところをまずご回答いただいてから進めるというのはどうですか。

(野村主幹教育支援主事)

高校改革プランに向けての対応について、全体的のところでのご質問でございますか。

(篠原教育幹)

高校教育課教育幹の篠原です。

いわばこの全体会と、この第1回の推進委員会と、この日程的な問題が幾つかございまして、全体会のところでも話がありましたように第1回ということで一応、大筋の説明を私どもの課長のほうからさせていただき、またその前段で教育長職務代理者のほうからもうごあいさついただきながら、これから推進委員会の委員として皆さんによりしく願います。そういうまず、前段をつくりながらこの各地区に分かれた、各地区に分かれた委員会というものがあるのが、本当の、本当のと言いますか、本来の推進委員会となるわけですし、本来の推進委員会に入っていこうという日程を始めたわけです。言ってみればどこからスタートしているかと申しますと、一番大きなスタートはこれは今年3月に発表された最終案。ここからスタートしています。

これはいわゆるひとつの課題を、検討委員会が練り上げて、そして最終報告する。それを受けた形でやはりそこからスタートというというのが、これが議論の進め方としては妥当であると、そのように思っています。

ということになりますと、やはり全体会というものを、本日行ったということは、先ほど申し上げましたように、全体としてのご説明も必要ではないか。それから教育長職務代理者からのごあいさつのほうも、全体の皆さんにお話ししたと、そういうことの想いで全体会を開かせていただいたということでございます。そういうことで、本来分科会の中でというふうなことがございますけれども、やはりこの第3通学区にかかわる1つの課題について、この場ではお願いしたいと。また教育の理念とか、教育そのもののありかたそういうものにかかわる議論も、当然具体的なものが出てくると思います。そういったものも含めながらここで準備をして。そんなふうに思います。

以上です。

(池上委員長)

このように整理してよろしいですか。そうすると、ここで基本的な問題の議論をさせていただいてその後また、全体会に押し上げるということがあり得るというわけです。

(篠原教育幹)

よろしいでしょうか。

全体会は、先ほどの全体会のところでも、課長がご報告申し上げたとおり今回が最終で、そして恐らく今回で全体会というものは開かれることはなくて各地区の検討委員会にて具体的に検討いただきたいとこのように思っております。

(岡庭委員)

はい。ちょっとよく分からない。あれですか。これもいってみれば最終報告の解釈は、各推進委員会のそれぞれの解釈に任せると。だから我々が考える意味で、先ほども教育委員長さんがおっしゃったように本来の、現在の高校生の状態も学校教育全体を考えれば、大体6学級だということでは解決しないのじゃないかと、第3通学区のいってみれば委員会、推進委員会の結論としてみれば、言ってみれば答申内容のことを現状でいいじゃないかという結論ができれば、それでもいいということですよ、これは。今のお話ですと。

(篠原教育幹)

少し言葉が足りなくて恐縮ですけれども、ひとつはやはり前提になるのはこの最終報告からスタートしていただくことが非常に大きなことでございます。ここから進めていくということ。

それから2つ目は、ここで非常に重要になるのは、これは5月の定例教育委員会の中で宮澤教育委員長が4月におっしゃられたものを、それを事務局として対応し、そして数については定例委員会の中で、お決めいただいたということがございます。そういった2つの事項について、これはやはり尊重していく形の中で、今後進めていただくことを推進委員会の委員さんをお願いしたいと思います。

それからもう1点でございますけれども推進委員会の設置要項でございます。設置要項につきましては、先ほど全体会のところでご説明があったとおりですけれども、設置要綱の第2条でございます。資料3でございますけれども、推進委員会につきましては教育委員会の依頼に応じ次の各号に掲げる事項について検討し、その結果を教育委員会に報告するということでございます。そういうことで(1)～(4)までご検討いただきということでございます。いわゆる要綱に沿った形で推進委員会の進行をお願いしたいと、そういうことなのです。

(小口委員)

よろしいでしょうか。

小口でございます。

実は私は、この前の懇話会のほうにも出させていただきまして、全部懇話会のほうに出るということもかなわなかったわけですが、大枠の感じをこの本の21ページにブロック単位の高校再編の検討と書いてありまして、この図がありますけれども、たぶん県のほうで進めていきたいのは、要するに検討委員会、あるいは懇話会、あるいは県の説明会の中で、大筋については先ほどの、今までのいろいろな意見も含め大部練ったのです。その面もだいぶ練りました。それで確かに学校の数をどうするかということもいろいろ話がありましたけれども、大筋ではそういう方向になっていったので、その大筋の中でやはり地区で決めていくという方向が必要なのでこの、第1通学区とか、四角の図がありますけれどもイメージ図ですね。

この第1通学区、第2通学区、3、4ということですが、第3通学区の中で審議機関と書いてありますけれども、この審議機関が多分高校改革プラン推進委員会という位置付けだろうと私は思っております。間違いだったら言っていたきたいと思うのですけれど

も、そして進め方としては大体こういう検討委員会で、あるいは懇話会の中でいろいろ練ってきた中で決められたので、そういう方向で、要するに「教育委員会を諮問する、そういう位置付けでやってほしい」と、こういう位置付けだと私は思っています。多分もちろんスケジュール内の中でいろいろ検討できるならば、いろいろ本質論については持ち上げることはやぶさかではないと思いますし、あるいは予算的なことも含められるならば、要するに第3通学区の中でどれだけ補てんするかというようなこともある。第3通学区だけはお金を掛けてもいいということではないと思うので、そういうことができるならばそれはやぶさかではないんじゃないでしょうか。それは後の検討の内容だと思います。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。事務局、今の件について。

(野村主幹教育支援主事)

今の件というのは、ここでの議論の…。

(池上委員長)

今、小口委員から進め方だとか、そういうことを含めての議論は出していくのはやぶさかではありませんが、今回については所掌の中でやっていただきたい。

(野村主幹教育支援主事)

はい。おっしゃるとおりでございます。設置要綱の中でやっていただくということでお願いしているところでございます。

(池上委員長)

いかがでございましょうか。

(藤本委員)

ちょっと座って、申し訳ない。失礼します。

事務局の先生のご発言は僕、なんとしても納得できないのは、最終報告で「数はお決めいただいた。尊重していただく」。それから先日の定例会でも「数はお決めいただいた。その数は尊重していただく」と。しかし先ほど高校課長は「目安である」とおっしゃった。ずいぶん発言の内容が違うのですけれども。さっき事務局の方も「数は定例会で決めていただいた。尊重していただいた」と。目安だということをきちんと確認したいと思うのですが。

(野村主幹教育支援主事)

はい。76 に対しまして地区ごとに決めているわけでございますけれども、おっしゃるとおり学校数 22 で、それにつきましては目安でございます。

ただ目安というのはまた、ころころ変えてもいいかということではなくて、尊重

していただきたいという点でございますので。先ほどの発言はそういう趣旨で。

（岡庭委員）

はっきりしないのですけれども「ここでやらなくてはならないことは、教育委員会が決めたので仕方がないですよ」ということを答申していただきたいという会ということになるのですか。

（野村主幹教育支援主事）

はい。委員長。

（池上委員長）

それでよろしゅうございますか。

（野村主幹教育支援主事）

はい。ちょっと。それじゃあ。難しい言葉で答申とか、あるいは諮問とか、そういう言葉を使っていますと非常に難しくなるのでございますけれども、もし答申とかそういう言葉がここに2条に書いてある言葉だとすれば、2条のことでございまして、検討していたいたり、あるいはその検討を報告していただくということでございます。

（関 委員）

今までの検討、ここまで来た流れがあると思います。改革プラン検討委員会で検討し、さらに懇話会で討議して、その中で学級数は幾つが一番やりやすいのか、理想的なものは幾つなのかを検討し、その結果が6学級、最終的には5.5学級となったのだと思います。また、学校数はこの場合だと22というふうな教育委員会案ができた。このことについて、いいかどうかとここであらためて検討、つまり、教育の本質論からあらためて検討するとなると、いわばこの最終報告をまたこれから時間をかけてリニューアルしていくということになるもので、話がそれでは全然進まないのではないか。やはり、私もは改革プランを受けて推進していくわけですから、この6学級なり、あるいは学校数を尊重して、そこからスタートすべきではないでしょうか。

もう一度これを最初からやり直すということになると、全くこの推進委員会の意味が無いというふうに私は思うのですが。

（小池委員）

いいですか。

今、小口さんが言われたこととか、篠原先生が言われたこととか、関先生が言われたこととか、会の筋論とすればそのとおりだ。推進委員会の論議を経て、こういう答申が出されたということで、じゃあそれを具体化するのは推進委お前らだと。そういう辺りのところは本当にどうなるのか。諏訪でいえばA高校をなくすぞと、はっきり言った場合、A高校でも、これだけの子どもが、地域の子どものがこれだけ学んでいる。それを委員として、なくせと言われたからなくしましたということで、それで責任は取れるか、ということな

んだよね。

当然そういう問題は数合わせの問題でなくて、経済的に厳しいのは分かるのだけれど、その前の段階から話をし合わなければ、我々は納得した形でそれにかかわれないと私は思うのです。「こういうものがあるよ。これはそのまま 100 パーセント受けなさい」と言う。前提が先にありきということで、「あなたの理由や、考え方での校数は要らないよ。よって検討委員会の結論に従って、後は、推進の形で答申しなさい」ということ、これは僕自身としてはできないです。今のところは納得できないし、又ここの所が推進委員会に必要性やスタンスが分からない部分なのです。

（岡庭委員）

私は実は、県の町村会から推薦で出ているのですが、その辺の議論もしっかりと話をしないと、個人としては、推進のための委員会というのはこれは意に反しますから、この話は保留していただかないと、推進というのはあくまでも追認する委員会であるということであるとすると、責任をもつことはいたしかねると。

（池上委員長）

もう一回おっしゃっていただけますでしょうか。

（岡庭委員）

結論としては、私は追認の立場を保留させていただく。

県教育委員会のものを、進めていくという、懇話会その他で検討してきたのだから、大系としてこのようになったのだから、これを進めていくという委員会の形になるのであれば、私の解釈とは違いますから、これは保留させていただくしかないと思います。

（池上委員長）

確かに、おっしゃることもあると思いますが、今回所掌として出されている内容は2つの項目ということで出されておりますので、結論を出すとするれば、まず所掌について出すということではないでしょうか。

それから、今の話の事項についても併記して「このような意見もある」という形では出せるとは思います。

（岡庭委員）

それは、全体の会合でそういうことが許される。そういうことは委員長、私はそれでいいだろうと思いますが、要するに推進をしていくためにあなたは委員になったのだということではお受け致しかねるということです。

（池上委員長）

事務局どうですか。

(野村主幹教育支援主事)

高校改革というものは、要綱第1条にありますように、高校改革を推進していくための委員会ということであります。しかし、高校改革の中身につきましては、当然委員会での審議をお願いしていく中で、中身は決まっていくと思いますので、高校改革そのものがけしからんということになってしまいますと、困ってしまうのですが、中身については、「こういうものである」というものは決まっておりませんので、了承願えればと思います。

(岡庭委員)

高校改革をしなくてはならないということは賛成ですし、魅力ある高校をつくっていくことについては賛成なのです。しかし、これをやるにあたってすぐに学校を減らすことだということについては、賛成しかねるという話です。

(小林委員)

関校長先生に異論があるのですが、言っていることは小池校長先生と通じるところがあると思いますが、私らはこれが絶対よいということで受けたわけでも何でもないのでですね。そういう方々が、苦勞してやったかもしれないが、受けた私らは全く白紙の立場ですよ。はっきり言うと。

ですから、そういうことは全く抜きにしてやっていかないと、話にならんというのであれば、それはそれまでですが、先生がおっしゃるように、もういっぺんやり直しとは考えてはおりません。基礎として「こう」だと縛ってこれ以上のことはまかりならんということになると、言うことがなくなってしまうわけです。諮問とはそういうものだと思うのです。私たちも町で教育委員会で諮問していますが、給食の民間委託を諮問しています。必ず「しろ」というものではないと思います。「民間委託」を検討してもらって、本当にこれが食教育にもかなうということならば進めてもいいし、良く検討したら、問題が出てきたという場合もあるわけです。そういうことを言っているわけです。

ですから、目安は目安でやってよいのだが、標準ということは、あくまで7,8ということもあるということですから、本当にこれで魅力ある学校ができるのであるか、疑問があります。

そういうことを、ここで一切言ってはいけない、あくまでも標準6でやってくださいということであれば、話をすることがなくなってしまう。私の頭で考えて議論してもらいたいから、尊重というのはいいと思いますが、新しい意見を一切否定するということなら、私は納得できません。

ですから、私は委員を引き受ける時に確認したのです。そうしたら県教委で自由な意見を言っていたく会であるとの話であったので委員を引き受けました。

(関 委員)

最初から全部元に戻してやり直すのではなくて、最終報告をもとに議論が進んで行けば、どの学校をどのようにするということが出てくると思います。そのように進んで行く中で、教育の本質などを議論されることは構わないと思っておりますが、入口の部分からもう一回やり直して、ということになりますと、この委員会の議論は進まないのではないの

かと思います。

（小林委員）

私は、全体がここでもういっぺん蒸し返してやり直すということではなくて、そういう疑問は疑問として全体会の中で受け止めてもらって、そういうものは検討の中でそれぞれ柔軟にやってほしいという申し合わせができれば、私達も尊重しながら話ができるというものだということです。

そういうふうにしてもらわないと、諮問機関としてはおかしくないかということです。

（小池委員）

他の部会でもこのような話は出ていませんか。第3部会だけですかね。

（野村主幹教育支援主事）

今、小池委員さんのほうから、他の部会でもという話がありましたが、それは分かりかねますが、先程小林委員さんから出された意見につきましては、先程も申し上げましたが数値というものにつきましては、目安でございます。しかし、委員さんがおっしゃるように尊重してやっていただきたいと思っております。

（池上委員長）

目安ということでございますね。

結論がぶれたとしても、構わないということですね。

（小林委員）

ですから、一般的な機関ではなくて、推進委員会ですから、うんと具体的なことを検討していく中でいろいろなことが出てくると思うのです。

目安は目安として良いのですが、絶対に目安に当てはめていかなければならないとなると、例えば、分校化することもあると思うのですが、それはこの諮問には絶対出ていないことですよね。ですから、さまざまなことが考えられる中で、まず数を減らすということを頭に出されてしまうと、私たちは改革プランと言っても話ができず、黙ってしまうしかないと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。

議論を継続していく課程で、何がでるのかわかりませんから....、

（小林委員）

ひとつすみません。

この資料4はどういうことですか。(2)の標準目標値としての1学年6学級は、最終報告では、あくまでも目標値として記載されていますよね。また、新たな学校を設置する場合といっていますよね。これは、どういうことですか。

新たななとなっていますので新設の場合ですよね。新設する場合はこういう規模でやることが望ましいと、ですから、こちらでいっているのは、あくまで再編の場合は、6 を基準にやっていくということは新たな学校をつくる場合「1 学年 6 学級」ということですよね。このところはどのようになっているのですか。

（池上委員長）

これは、おそらく、このような議論をした場合にたまたま例として、このようなこともありうるという幅の広い考え方を示しているのではないのでしょうか。

（野村主幹教育支援主事）

標準目標値としての 1 学年 6 学級ということであると思いますが、新たな学校を設置する場合には、それで設置することが望ましいと、それから、今後さまざまな形で、先程分校というものも出ましたが、いわゆる統廃合等が行われる中でですね、片方の学校がもう一方の学校に吸収されることやそうではなく、対等な形での合併ということを考えるいえでもやはり、6 ということは目標にできると思います。そのように捉えていただければ良いと思いますが。

（池上委員長）

他に、委員会の本質論となるものがございましたらお願いしたいと思いますが。

（藤本委員）

事務局に伺いたいのですが、最終報告では諮問機関とすることが望ましいとなっていますが、最終報告でこのような記載になっているにも拘わらず推進委員会が諮問機関とならなかったことに疑問を感じておりますが。

（野村主幹教育支援主事）

諮問委員会や諮問あるいは答申という言葉でございますが、先程申し上げたのですが、設置要綱に記載のとおりでございまして、諮問や答申という形はとっておりません。

第 2 条でよろしいかと思いますが、さまざまな意見を出していただいて検討していただき、その結果を教育委員会へ報告していただくというものでございます。

（藤本委員）

なぜそのような形になっているのか、諮問というのは、教育委員会がわれわれ推進委員会の答申を、言葉はあまり良くないのですが、尊重しなければいけないということで、教育委員会としてもかなり重いものを持つと思うのです。

しかし、今までも各 12 通学区で開かれた地域懇談会や先程小口委員が言われたように懇話会等の意見がありましたが、最終答申を見ると、パブリックコメントなどの意見もあったが、どれだけ反映されているのか疑問を感じている。この会をあえて諮問としないで推進としたことは、悪い言葉を使えば、さまざまな意見は言ってもらったが、あまり尊重しなくてもというようなことが、何となく見え隠れするように感じるのです。さらに教育委

員長さんが、校名まで教育委員会で検討するのだという言葉を見ると、非常にわれわれは危惧しています。

（池上委員長）

今の話の諮問と推進の言葉の定義があまりよくわからないのですが、説明をお願いします。

（野村主幹教育支援主事）

高等学校改革プラン検討委員会の最終報告には、審議や諮問という言葉が出てまいりますが、地域の実状を踏まえて、実施計画を策定するために、地域の関係者が議論するための機関を各地域に設置するということで、第3通学区なら第3通学区にこの委員会を設置してさまざま出された意見を考慮して実施計画を策定していく必要があるという考え方を紹介しておりますが、法令上にある「審議」や「諮問」という意味ではなく使っているところに誤解を招くのかという気がしていますが、要綱の方では教育委員会の依頼に基づき検討し報告するというようにございますが、あくまでも、教育委員会が実施計画を策定する上で県民の皆さまの意見を参考にしたいという趣旨のものでありますので、「諮問」や「採択」や「答申」という言葉は用いていないということでございますが。

（池上委員長）

それでは、先程の小池委員の4つの話に戻っていただいて、小池委員、1,2,3,4につきましては、今までの議論の中で解氷したものとそうではないものとがございますように思います。

（小池委員）

まず尊重してほしいのは、「縛られる」ことがないようにしてほしいということと、2点目ですが、責任の所在をはっきりとさせること、又、県民の意見として、フラットに討論していただいて、その上で教育委員会ではそれを参考にいただき、責任は教育委員会で持つ、ということだと思いますので、これで良いかと思います。

たたき台の数の問題であります、目安ということですので、この中で検討したがひとつもない（一校も削減がない）ということになっても良いということでしょうか。

5月から12月ということですが、期間的な問題もあり、ちょっとペースを速めなければ厳しいと思います。12月までに結論を - ということについて、お考えいただいたほうが良いと思います。

（池上委員長）

それについては、あとでということをお願いしたいのですが。

（小池委員）

はい。

(池上委員長)

では、冒頭に委員からお尋ねのありました本質論と、それに対するものについては、今後の議論で進めていきたいと思いますがいかがでしょうか。

(岡庭委員)

どのような形になるのか。「こういうものがありましたよ」ということで、並列的に出すということになるのか、多数決をとって出すのかということについては、事務局はどのように考えているのか。

(野村主幹教育支援主事)

検討していただいた意見を多数決という形をとるのではなく、内容を報告していただくという形で考えております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

では、もう少しお時間があるようですのでご意見をいただきたいと思います。

(小林委員)

何回も申し訳ありませんが、具体的なものでいいですか。

私は義務の経験しかないので高校のことはよくわかりませんが、今小学校から少人数学級の流れで30人学級やそれを今後は中学に持っていこうという動きがあるわけですが、それなりに効果が出ているわけですが、例えば普通科、職業科の教員定数は、国基準だけでやっていくつもりなのか、県の信州こまやかプランはあくまで県である程度独立性を持ってやっているわけですね。そこで、学級数を議論する基になる教員定数は、義務の場合は国基準が決まっていて、1人でもクリアできなければ、学級にできないですね。高校の場合はどのようなになっているのか、その一番大事なところが出ていないのでそのところを、普通科、職業科あたりも同じなのか、また少人数学級を一切導入しないという考えているのかどうか、それも併せて教えていただきたい。

(野村主幹教育支援主事)

小中のほうでは30人学級ということで進められているということで、先程学級数のところでは高校では当然40名ということで計算しております。

しかし、実態という形で申し上げますと、職業科や専門科などでは実際に全ての学校で40人学級が行われているかと申しますと、入学者の状況によりましては、40人より少ない規模で運営されている高校もございますが、基本的には、40を1学級という形にしております。

(小林委員)

少人数学級は一切取り入れないということでしょうか。

(篠原教育幹)

高等学校の教員の定数については、先程説明させていただいたとおりでございますが、基本的には40人を1学級という形で実施しております。

それから、お尋ねの少人数についてでございますが、これは例えば40人という募集をしたとします。120人を3クラスで募集しようということにしますと40人ですね。極端な言い方をしますと。これは、いわゆる教員定数というものは全体の生徒数を基準にしますので、大きな目安になりますが、学校によっては先生方が努力をしまして少人数学級をつくりまして、行っているところもありますが、少人数学級をやったからといいまして、手厚い学級をつくったから国の加配措置があるということではございません。

(藤本委員)

次回までにデータが欲しいのですが、他県では高校でも少人数学級が進んでいるところもあるのですね。例えば、東京都の職業高校あたりでは35人というものがでております。確かに高校改革で学校を減らしながらということもあると思いますが、職業高校や地域高校でかなり他県で進んでいる状況を見ると、平成30年度まで全く40人でやるということとはちょっと展望がない。ぜひ次回までに他県での少人数学級の状況をデータとしてもいただきたいなと思います。

(池上委員長)

事務局のほうでお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

今の、少人数学級の他県データでございますけれども、次回の委員会時にご用意させていただきますと思います。

(池上委員長)

だんだん時間がなくなってまいりましたけれども、時間で切る問題ではないと思いますが、他の委員の皆さんでご意見ございますか。

(熊谷委員)

これから議論して行く中で、それぞれの学校で特色あるとりくみを行っているところもあると思います。そういった実態をぜひ小規模な学校や地域高校などががんばっているところがありますので、第3通学区での実態というものがあれば、ぜひ出していただきたいと思います。

(池上委員長)

事務局のほうで対応できますでしょうか。

(野村主幹教育支援主事)

よろしいでしょうか。

それにつきましても、できるだけ準備したいと思います。しかし、学校要覧の中でもまとめてございますので、そちらもご覧いただきたいと思います。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。

(小林委員)

もうひとつ、小規模校が多いために規模に比べて職員数が多すぎるというようなことが出てまいりましたが、本当にそうなのか知りたいのでその資料もお願いします。

(池上委員長)

対応できるでしょうか。

(野村主幹教育支援主事)

はい。

(池上委員長)

それでは、他にご意見はありますか。

(小口委員)

ちょっと離れてしまいますが。

実は、私は先程紹介の時に話しましたように諏訪で製造業をやっております、高校改革も学校改革もそうなのではと思うのですが、われわれが考えるのはどういうふう将来の大人をつくっていくのか、その過程の中で小中学校や高校がどうあるべきかという話であると思います。

今製造業で実は私共 10 年前に中国に工場をつくりましてやっていますが、非常に中国もインドや韓国などもそうなのですが、非常に若い世代がすごいんですね。ものすごくやる気はあるし、協調性はあるし、アイデアはあるし、そういうことの中で日本の企業を比べた時に、このままで大丈夫なのか、今までであると、中国は人件費が安いからやっというということで、中国は量産工場であったわけですが、少なくとも諏訪は頭脳で勝負したいと思いたいのです。ところが、安いほうでも負け、頭脳でも負けたら勝つところがないのです。諏訪は製造業が多くて 4 割以上が製造業なのですが、その中で何とか諏訪をものづくりの地域にしたいと考えてやっているのです。ところが、そのような状況になってしまいますものづくりができないのです。

先日中央教育審議会の木村孟先生のお話を伺いましたら、ゆとり教育と批判されていますが、ゆとり教育を何年かやったが、学力のレベルのグループとしては、さほど落ちていないというのです。国が多くなってきているのでランクが下がったりはしているが、グルーピングとしてはさほど下がっていない。むしろ問題なのは数学や理科が「嫌い」とい

う子供が多いということなのです。アメリカなどは、さほどできないが、「好き」なのですね。基本的に自然科学などが。問題はそこであるということです。

ですからそういう意味からすると、どうやって好きな子供を増やせるかということが課題だと思います。

実は、私の娘が1年間アメリカに行っておりましたが、通っていた学校は非常に大規模で2,700人くらいいる学校で、先生も沢山おり、選択肢も沢山あるので面白いと言っていました。しかし、帰国すると日本では受験勉強一色になってしまい、何しろ面白くないという意味合いがありますので、できれば、そのような子ども達にどうすれば興味をもってもらえるような学校をつくっていったらいいのか、というようなこと、少なくとも、南信もそうですし、諏訪もそうですがそのような学校をつくってもらいたいと思います。

(岡庭委員)

私が言った中で、高校改革検討委員会を見させていただいた中でこのことをある委員が、長野県の教育に全く関係のない人がきて、長野県の高等学校の校長が入っていないんですよ、あの検討委員会には。

その中で検討報告書が出て、懇話会はやりましたと、しかし懇話会に出席した町村長に聞いたのだが、聞く程度だと。結論が全てこの本(最終報告書)に書かれているんだと。

今言ったように、本当に子ども達にどのような教育を与えることが必要なのか、長野県の地域は、どのような子ども達を必要としているのだろうかという議論をもう一度してですね、その上で高校はどうあるべきか、地域が必要とすれば30人学級や1学年2クラス以下の学校があってもいいじゃないですか。私は、本質論の入口の議論をしてほしいと思います。

(小口委員)

特定の地域の議論などそれはあってもよいと思います。

(岡庭委員)

私は学級数ではないと思うのです。1クラス5.5学級ではないと思うのです。

(関 委員)

ですから、その議論を改革プランや懇話会で議論してきたわけですよ。その流れを受けて推進委員会は具体的に考えなさいということです。私は数字やそのものに縛られるわけではないが結論は尊重していきたい。その具体的なものを考える中で数の議論やその他のものもでてくると思うのですが、これから具体的な校名なども含めてこの会で検討していかなければ議論は進まないのではないかと思います。

(池上委員長)

私もこの席に座らせていただきましたので、そちらにいましたら全く違うことを言っていたかもしれませんが、長野県の教育をどのようにするのか、また日本の教育をどうするのかということに、小口委員も関わっていらっしゃる経営者協会などはこの1点に絞

っていますので、これをまた、ソフトの話をするときにはですね、考えていただきたいなと
そのように思っております。

それでは、次回以降のことについて事務局からお願いします。

（野村主幹教育支援主事）

今後の日程の持ち方などですね、ご意見ございましたら、委員会のほうからいただきた
いと思いますが。

（池上委員長）

いかがでございましょうか。

先程小池委員からこれに関する意見があったのですか。

（川島委員）

事務局がお考への開会の場所でございますが、上伊那、諏訪、飯田で順番でやるか、ど
こか伊那あたりでずっとやるのか、そういったことについてはいかがでしょうか。

（野村主幹教育支援主事）

いまのところ、南信の委員会でございますので、基本的には伊那でやりたいなと思っ
ております。しかし、委員の皆さまが今度は飯田や諏訪でやってくれという話があるよう
でしたら、そういう場所をお探しいたします。私の頭の中では伊那合庁あたりかなとは考
えておりますが、長野まで出てくるということはないようにとは思っております。

（池上委員長）

今回はここで伊那にさせていただいて、次回のときにまた先程のお話のように場所を変
えたらというお話も出てくるかもしれませんが、今回は伊那ということではいかがでござい
ましょうか。

（全 員）

異議なし。

（池上委員長）

あとは、期日でございますが、これは事務局でお願いいたします。

（野村主幹教育支援主事）

ここでお示しできれば良いのですが、現時点ではお示しできないので、委員の皆さまが
当然多く参加できるような日時を探していきたいと考えております。

もし、例えば本日は日曜日でございますが、日曜日にやってほしいというようなことで
固まれば日曜日で開催したいと思いますし、伊那で開催なら平日の夕方が良いということ
というようなことがございましたら、承っておきまして参考にさせていただきたいと思いま
すが。

(池上委員長)

曜日の問題ですが、いかがでしょうか。

(小林委員)

休日は勘弁してください。

(池上委員長)

他の皆さんはいかがでしょう。

それでは、私どもと事務局で調整をさせていただいて、日程を固めていきたいとします。

他になにかございますでしょうか。

(藤本委員)

今回は、何を議論していくというようなものはないのでしょうか。

(池上委員長)

議題は特に自由ということではないでしょうか。

特にご意見がなければエンドということによろしいでしょうか。

(野村主幹教育支援主事)

今、議題を自由にというお話がありましたが、お願いしております1から4までの項目がございますので、その中でお願いいたします。

(池上委員長)

いかがでございますか、特にご意見はございませんか。

(岡庭委員)

今日は、われわればかりしゃべってしまっていたので、広く議論して自由にやっていたいただいたらいかがでしょうか。

(池上委員長)

それでは、このようにさせていただいては、いかがでしょうか。

私も初めてでございますし、資料を拝見したもの直近でございますので、皆さんもそういう方が多いと思いますので、次回から本格的な議論に入っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(野村主幹教育支援主事)

お配りいたしました資料についてでございますけれども、先程も少し触れさせていただきましたが、まず次回の推進委員会にもご持参いただきますようお願い申し上げます。それから、学校要覧の綴りでございますが、大変重い資料となっておりますのでご希望がございましたら、事務局で一旦お預かりして次回の推進委員会の際にお持ちしたいと思って

おります。机の上に置いていただければよろしいかと存じます。お持ち帰りをご希望の方はお持ち帰りいただいて結構でございます。

（小林委員）

開催するときには最低2週間前くらいには連絡してほしいと思います。

（池上委員長）

それでは、そのようにさせていただきたいと思います。

（川島委員）

それに関連して、できれば 月は何日というように日を決めてほしいと思います。

（池上委員長）

次回までにですね、調整いたしまして、次回に報告できるような形にしたいと思います。

では、この辺でよろしゅうございますか。

では、そういうことで、本日はありがとうございました。